フェイスワークを集団内の相互作用から捉える
——日本語学習者に対する PAC 分析から見えてきたもの——

横　溝　　環

Facework from the Perspectives of Interactions between Members: A Case Study of a Japanese Language Classroom by PAC analysis

Yokomizo Tamaki

The purpose of this study is to investigate how facework is related to interactions between members. The participants were international students in a Japanese language classroom. To clarify the group structure of the class members, MDS (multi-dimensional scaling) was employed. Moreover, the PAC (Personal Attitude Construct) method was used in order to examine participants' interpretations of themselves, their classmates and the class to which they belonged. From this study the following three findings became evident: 1) The formation of the group structure is related to the symbols created by the interaction between members. 2) The formation of the group structure and the symbols are related to members' interpretations of themselves, their classmates and the class to which they belonged. 3) Interpretations of the symbols depend on each of the members, and are related to facework. More research should be conducted to explore how the symbols are created by the interaction between members, and are related to facework.

キーワード: フェイスワーク、相互作用、シンボル、解釈、集団構造、PAC 分析、外国人留学生

1.　目的と意義

本稿はシンボリック相互作用論の視点から、集団を構成する成員各々のフェイスワークと集団との関わりを、多国籍メンバーで構成されている日本語学習クラスでの事例を通して検証することを目的とする。各成員のフェイスワークを彼らの属性および文化的背景からではなく集団との関係性つまり他者との相互作用との関わりから明らかにしようという視点は、日本語学習者という枠組みの中だけではなく、対人コミュニケーション、国際関係など幅広い研究領域に応用できるのではないかと考える。

2.　背景

2–1.　フェイスについて

フェイスという概念の起源は紀元前 4 世紀の中国にあると言われている（Hu 1944）。今ではフェイスはあらゆる文化に存在する概念となり（Ting-Toomey 1988）、様々な定義づけがされている。例えば、フェイスの研究の第一人者として有名なゴフマン（2002、5 頁）はフェイスを「認知されているいろいろな社会的属性を尺度にして記述できるような、自分をめぐる心象（イメージ）」、Brown and Levinson（1987, p. 62）は「社会の全ての構成員が求める公的な自己イメージ」、Ting-Toomey（1988, p. 215）は「ある関連のある状況において投影された自分自身のイメージ」、末田（1998、103 頁）は「ある社会の枠組みの中で、他者に認識して欲しい公的なイメージ」と定義している。本稿ではこれらを踏まえた上でフェイスを「ある環境の中で、獲得または回避したい自己イメージ」と定義することとする。

ポライトネス理論（Brown and Levinson 1987）では、自分または他者が期待するアイデンティティが脅かされたり重んじられなかったりする状況で、フェイスは著しく表面化すると言われている。Brown and Levinson（1987）は、フェイスを positive face（他者に受け入れられたい、認められたい、評価されたいというフェイス）と negative face（他者に自分の邪魔をされたくない、自己の尊厳やテリトリーを保ちたいというフェイス）の 2

つの側面に分けた。Lim and Bowers（1991）は、positive face を fellowship face（受け入れられたい、一員でありたいというフェイス）と competence face（能力を認めてもらいたいというフェイス）の 2 つに分け、negative face を autonomy face と改めた。本稿では、これらの分類を考慮に入れ、各成員のフェイスを捉えていくこととする。

Oetzel ら（2001）は、中国人、ドイツ人、日本人、アメリカ人を対象として、文化的自己観（Markus and Kitayama 1991）、集団主義―個人主義（Triandis 2001）、権力格差（Hofstede 1991）、親疎関係および地位、国籍がフェイスにもたらす影響を調査した。その結果、最もフェイスに影響を与えたのは文化的自己観で、相互独立的自己観の高い者と self-face、相互依存的自己観の高い者と other-face、mutual-face の関連が見出された。[1)]

既存の研究には個人の属性や文化的（心理的）傾向を独立変数としフェイスの検証を試みているものが多い。確かに、このような「実証主義的アプローチ」[2)] はフェイスの傾向をマクロの視点から捉えたという点においては多大な貢献がある。しかし、それらには身近な他者との関係性をどのように解釈しているのか、つまり他者あるいは集団との相互作用という視点が含まれていない。実際、個人の属性や文化的傾向による差異自体、本人を取り囲む環境との相互作用によって生じたものであると言っても過言ではない。だからといって、属性や文化的傾向がフェイスワークの要因として常に意識されるとは限らないだろう。相互作用によって生成された他の要素がフェイスワークに影響を与える可能性もあるのではないかと筆者は考える。そこで、本稿では、まず集団を構成している全ての成員から自己・他者・集団に対する解釈を得、それらから多くの成員に共通している視座、すなわち共有されたシンボル[3)]を抽出する。そして、それらシンボルと集団構造における成員の位置関係およびフェイスワークとの関わりの解明を試みる。多様な属性および価値観が集結している日本語学習クラスには様々なフェイスワークが混在していることが予想される。成員間の相互作用によりどのようなシンボルが創造され、さらに、それらシンボルは各成員のフェイスの充足、喪失、修復等にどのように関わってくるのであろうか。本稿では、調査協力者それぞれの自己・他者・集団に対する解釈・意味づ

けからフェイスワークと相互作用との関連を捉えていく「解釈的アプローチ」を研究方法論とする。

2–2.　シンボリック相互作用論――ブルーマーの理論を中心に

シンボリック相互作用論とは「言葉を中心とするシンボルを媒介とする社会的相互作用に焦点を置き、そこにおける『解釈』過程に着目して、そこから人間の積極性・主体性と社会の変化・変容を人文科学的方法で明らかにしようとする立場」（船津 1995、3 頁）を指す。シカゴ学派の社会学者達がつみあげてきた理論を「シンボリック相互作用論」としてまとめあげたブルーマー（1991、2 頁）は、相互作用論の前提として以下の三つをあげている。第一に「人間は、ものごとが自分に対して持つ意味にのっとって、そのものごとに対して行為する」という前提である。これは言うまでもなく「意味」の重視を表している。第二に「このような物事の意味は、個人がその仲間と一緒に参加する社会相互作用から導きだされ、発生する」という点である。これは、「意味」は集団における人々の相互行為から生じる「社会的な産物」（ブルーマー 1991、5 頁）であるという考えを示している。第三に「このような意味は、個人が、自分の出会ったものごとに対処するなかで、その個人が用いる解釈の過程によってあつかわれたり、修正されたりする」（同掲書 2 頁）という考えである。これは相互行為の中で人々が行う解釈活動の重視を表している。同書の中でブルーマーは、意味を持つ物事を自分自身に指示し、自分が置かれた状況と自分の行為の方向といった見地からそれらを選択、検討、留保、再分類、変形する解釈過程のことを「自己との相互作用（self-interaction）」と呼んだ。そして、この解釈過程は意味の生成的過程であり、このような解釈によって人間は他者の期待に立ち向かい、それに働き返し、それを拒否したり、変容したりできる主体的存在となる（船津 1995）としている。さらに、人々は、お互いに異なった方法でアプローチし、異なった世界に住み、異なった意味の集合にもとづいて自分自身を導いていくにもかかわらず、指示と解釈の過程を通して形成され続けるものとしての集合体の活動、つまりシンボルを伴った「連携的な行為」を生み出しているという（ブルーマー 1991）。

各成員の「指示」と「解釈」からなる「自己との相互作用」、各成員の「自己との相互作用」の集合からなる「連携的な行為」、そして集団共有のシンボルの各成員による(「自己との相互作用による」)さらなる「解釈」といったサイクルが、日本語学習クラスという集団、日本語学習者という各成員においても行われているのではないかと筆者は考える。本稿では「自己との相互作用」による個人の(フェイスワークを含む)主観的な意味づけと「連携的な行為」に伴う集団共有のシンボルとの関係を中心に検討していくこととする。

2. 研究方法

2–1. 調査協力者

調査協力者は筆者担当の日本語会話クラス[4)]に在籍していた外国人留学生7名(年齢19〜25歳)である(表1参照)。

表1 調査協力者一覧表[5)]

調査協力者	継続生／新入生 ※(　)内は学期終業時の滞日期間	留学形態	国籍	性別	住居
A	継続生(1年)	私費	T国(欧米)	女性	Y寮
B	継続生(1年)	交換	U国(アジア)	女性	Y寮
C	継続生(1年)	私費	V国(アジア)	女性	Y寮
D	継続生(1年)	私費	V国(アジア)	女性	個人
E	新入生(半年)	交換	W国(欧米)	女性	Z寮
F	新入生(半年)	交換	X国(アジア)	女性	Z寮
G	新入生(半年)	交換	X国(アジア)	男性	Z寮

2–2.　調査方法

調査方法は、PAC 分析技法（Personal Attitude Construct: 個人別態度構造）[6] と集合調査による質問紙調査および参与観察[7]を用いた。

PAC 分析技法は質的研究と量的研究を組み合わせた調査方法である。従来の量的な調査方法では研究者自身のスキーマまたは調査協力者に共通するモノの見方に基づいて変数が絞り込まれることが多い。また、通常のインタビューだけでは要因の構造を捉えることは難しいとされている。しかし、PAC 分析技法では調査協力者一人一人のための調査項目を調査協力者自身が作成することが可能となる（内藤 1997）。さらに、連想項目のまとまりについてのみならず、連想項目間の関係についての解釈をも得ることができるため、要因構造の探索が比較的容易に行える（内藤 1997）。つまり、この技法は、研究者ではなく各学習者の視点・枠組みから捉えた自己・他者（クラスメート）・集団（クラス）、さらにはそれら全体構造が把握できる可能性を含んでいると言えるだろう。これらに加え、この技法により日本語力の低い学習者からも質の高い情報を得ることができるという事例（横林 2005）も示されている。

PAC 分析技法は学期終業時のみ実施した[8]。PAC 分析では、まず調査協力者に以下のような「刺激文」を与えた。そして、そこから浮かんできた「自由連想」一つ一つをそれぞれカードに一枚ずつ記入してもらった。その際、連想項目数および連想時間には制限を加えなかった。

> **会話のクラスを思い出してください。そのクラスには、A さん、B さん、C さん…[9]がいましたね。それはどのようなクラスでしたか？　そして、その中であなたはどのような人でしたか？　あなたは、クラス、クラスメートおよび自分に対し、どのように感じましたか。また、どのように行動しましたか。クラスが始まったばかりの頃と終わりの頃では何か変化がありましたか。頭に浮かんできたイメージや言葉を浮かんだ順に、カードに記入してください。**

次に、これら「自由連想」に「重要順位」をつけてもらった後、連想さ

れた項目間のイメージ上での「類似度」をたずねた。そして「類似度」の「距離行列」を「クラスター分析」し、デンドログラムを作成した。最後にデンドログラムの解釈を調査協力者自身にしてもらい、それをもとに調査者が総合解釈を行った。

質問紙調査は、学期始業時とその 3〜4 ヵ月後の学期終業時に実施した。そこでは、各学習者間の発話量(使用言語および使用場所・状況等を限定しない発話量)[10]を調査し(5 件法)、多次元尺度法[11]を用いてクラス内に生じた集団構造の検証を試みた。[12]

3. 結果と考察[13]

3–1. 集団構造(終業時)[14]と集団共通の視座(シンボル)の生成

PAC 分析の結果から、同じ教室環境に席をおいていても、そこでの各成員の自己・他者・集団に対する認識・評価は様々であるということが明らかになった。これは、まさに「ひとつの対象が異なる個人に対して、異なる意味を持つことがある」(ブルーマー 1991、13 頁)といった考えを象徴していると言えよう。その一方で、多くの調査協力者の自由連想および自らのデンドログラムの解釈に「自信」「緊張」「遅刻」「遊び」「一生懸命」「怖い」「真面目」「強い」といった言葉の使用が見られた。これらの言葉を整理すると、集団に共通した視座として「自信」「授業上の規範に対する真面目さ(以下「真面目さ」とする)」といった軸が浮かび上がってくる。これらは成員間の相互行為によって創り出された視座であると考えることができるだろう。これらの視座を多次元尺度法によって表した終業時の集団構造および各調査協力者の位置と照らし合わせてみると、次元 1 には「自信なし (+)――自信あり (–)」、次元 2 には「真面目ではない (+)――真面目である (–)」といった構造が表れてくる。これらは、集団が「国籍が同じである」「同じ寮に住んでいる」といった固定的な接近可能性に限らず、「自信」「真面目さ」といった創造的かつ可変的な視座と関わりを持ちながら構築されていることを示している。これら視座は、ブルーマー (1991) のいう各成員の「自己との相互作用」の集合からなる「連携的な行為」に伴

う集団共有のシンボルの表われであると言えるだろう。以上のことから、これら集団共通の視座を、本稿では「シンボル」と表すこととする。

（1）「自信」というシンボル（次元1）

各成員の解釈に見られた「自信」に関する言葉を終業時のクラスの集団構造と照合すると以下のようになる（図1参照）。自分と他者による解釈が一致していたのはB、G、F（「自信がある」）とC（「自信がない」）である。Aは「自分は自信がない」と解釈していたが他者からの言及はなかった。Eは「他者から自信がある」と解釈されていたが自らに対する言及は見られなかった。Dは自他による解釈が一致していなかった（「他者からは自信がある」と思われていたが、「自分は自信がない」）。

AはEとFを、CはBとGを、DはBとEとG、FはDとGを、それぞれ「自信がある者」と捉えている。つまりF以外は全て「自分は自信がない」と思っている者が他者を「自信がある者」と解釈している。それらの解釈の多くには「自信」に対する憧れの表現が含まれていた。しかし、「自信」を持っている他者の行為に対し、憧れと同時に脅威を感じている者もいた。AはEとFのスピーチに対して以下のような解釈をしている。

A: F さんと E ちゃんはスピーチする時、ちょっと怖い。…スピーチだけ怖くて人は怖くない。

さらに、DはBとEには憧れを感じているが、Gに対しては肯定的とは言えない解釈をしている。

D: B さんと E さんは自信があるように見えます。羨ましい。…それは私が欲しいもの。（C と G に対し）これは悪いとは言わない、言えない。でも自分はそうなりたくない。…緊張と自信の真ん中が目標かな。この状態がクラスに一番いいと思う。

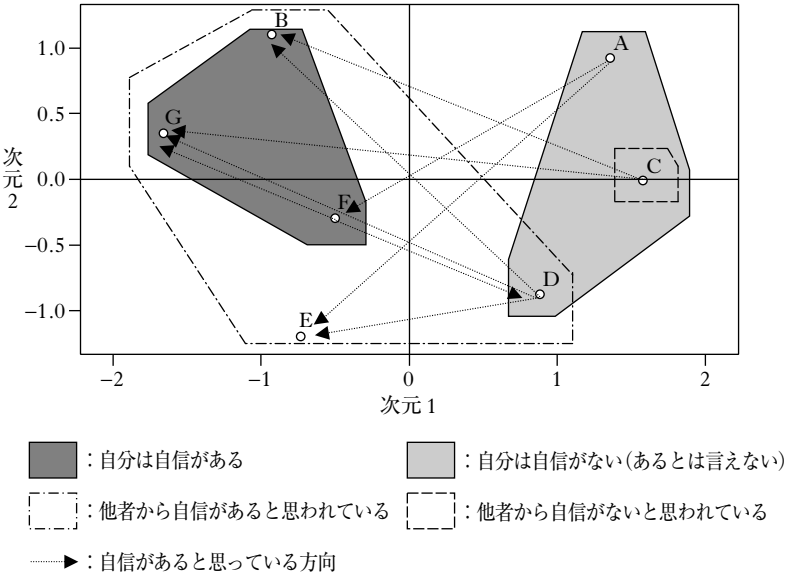


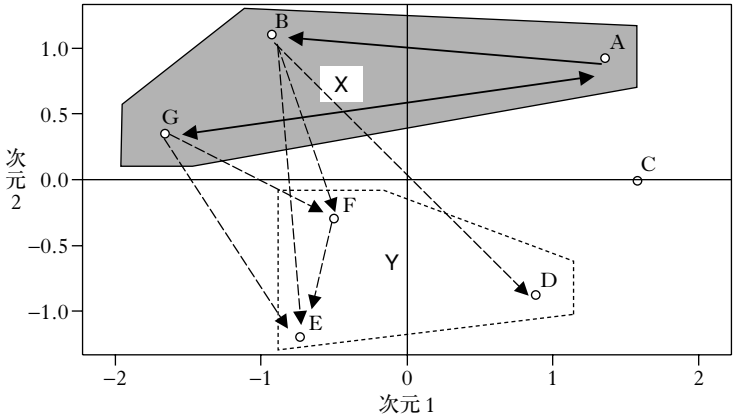
図 1　「自信」というシンボル[15]

B と D はそれぞれ C を「***恥ずかしそう***」「***緊張している***」と解釈していたが、B は「***(C は)恥ずかしそうな面をもっているがちゃんとできる***」、D は「***でも C さんは最後の時変わった(あまり緊張しなくなった)***」というように肯定的な評価を加えている。

(2)　「真面目さ」というシンボル(次元 2)

各成員の解釈に見られた「真面目さ」に関する言葉(「遅刻する(しない)」「怠け者」「遊びが好き」「一生懸命に勉強」等)を終業時のクラスの集団構造と照合すると以下のようになる(図 2 参照)。

次元 2 のプラスに位置している X グループの 3 名には「***遅刻をした***」「***怠け者***」であるという自覚が見られた。さらに、A は B、G に対し「***自分が遅刻した時、B も G もまだ教室にいない***」、「***(B さんは)楽しいことをしたり、遊びに行ったりしたい人***」、「***(G さんは)全然勉強しない人***」、G



：自分は真面目だとは言えない（遅刻が多い）。
（X グループの）他者から遊びなど楽しいことが好きだと思われている。

：他者から真面目だと思われている。

：他者を真面目ではないと思っている方向

：他者を真面目だと思っている方向

図 2　「真面目さ」というシンボル

は A に対し「***一生懸命ではなかった***」「***遊びに行きたいとか、旅行、友達とパーティーとか楽しい気持ちがある***」といった評価をしていた[16)]。

興味深いのは、「遅刻」に対する感情が調査協力者によって異なっているということである。A は遅刻をしてドアを開けた時の感情を以下のように語っている。

A: いい気持ち。みんなにこにこ F さん、E さん、みんな笑う顔。…来る前はよくない感じ。来た時大丈夫。来た時いい感じだから、心配な感じ忘れて、新しい感じ作る。

しかし、（能力が関わってくる）スピーチと朝の関係については、

A: 朝は頭がよく使えないので、もっとスピーチが怖くなります。…朝起きるのとスピーチが一緒になったら絶対に行きたくない(笑)。

と否定的な解釈をしている。A と同様の解釈が G にも見られる。

G: (僕は)たぶん性格はいいですけど、勉強の面では一番悪いですよ。よく遅刻しました。恥ずかしいです。…でもみなさん僕に注目しましたから恥ずかしくないです(笑)。

一方、B は「遅刻」のイメージを「灰色」という色で表し、

B: 雲がたくさんある日は全体的に雰囲気がこの色になるんですよ(笑)。曇った日が嫌いなんですよ。そんな気分。ドアを開けたら、みんな私を見たり、それはあんまりよくない雰囲気。

と語っている。これらから「遅刻」に対し A と G は competence face 喪失への脅威、B は fellowship face 喪失への脅威を感じていたということがうかがえる。つまり、前者は勉学に対しては引け目があるものの、自分が授業における規範を逸脱してもクラスメートは自分を受け入れてくれるだろうと解釈している。しかし、後者はそうは捉えていない。成員間の相互作用によって創造されたシンボルであっても、それらに対する各成員の意味づけは異なっているということがこれらから理解できる。なお、他の 4 人のメンバー（C、D、E、F）による A、B、G の「真面目さ」に関する言及はなかった。

Y グループは他者から真面目だと思われているメンバーである。自分自身について真面目であると言及した者はいない。D は B から、E は B、F、G から、F は B、G から「遅刻をしない」「真面目」である等の評価を受けている。つまり、そのほとんどが X グループからの評価である。さらに「自信」同様、「真面目」に伴う表現に「怖い」があり、D、E が共に G から「怖い」と解釈されている。A は「自信」と「怖さ」を、G は

「真面目さ」と「怖さ」を結びつけていることから、それがないことによって自分のフェイスが脅かされる恐れのあるもの――「自信」「真面目さ」――を持っている他者に対し尊敬と脅威の入り混じった感情を抱いている様子がうかがえる。また、「自信」「真面目さ」が一緒になることによって「怖さ」が引き起こされたということも考えられる。

3–2.　個のフェイスワークと集団構造およびシンボルとの関わり

（1）　調査協力者 D の PAC 分析の結果（調査者解釈）[17]

本来なら調査協力者全員の PAC 分析の結果を提示した上で、集団内の相互作用とフェイスワークとの関係について論ずるべきであるが、紙面の都合から、それらの関係が顕著に表れている調査協力者 D の結果をもと

図 3　調査協力者 D のデンドログラム

に、個のフェイスワークと相互作用によって生じた集団構造およびシンボルとの関係を見ていくこととする(図 3 参照)。

<CL1>「本当の私を理解してほしい――自己表出の模索」

居心地のよい自分の好きな場としてクラスを評価している。全般的に fellowship face が充たされているクラスターである。「***熱くてキラキラ***」「***いい感じ***」「***周りの人達から自分がもらった***」といったことからも、D が心地よい雰囲気に包まれている様子がうかがえる。さらに、「(***自分もクラスメートのように***)***なりたい***」「***そのままでなれると思う***」という表現からは、自分もクラスの雰囲気作りの一端が担えるのではないかという D の思いが感じられる。しかし、「***私はクラスメートに対して多分強そうだと思います。実はそうではないです***」という連想項目、「***私の今の状態をみんなは臆病じゃないと思う。実は臆病だよ***」という表現、さらには E と自分の類似点としてあげた「***積極的ではなくて、ちょっと悲観的***」という描写からは、本当の自分がこの集団の中で理解されているかどうかに不安を感じている姿が垣間見られる。これらから、実際は「***弱く***」「***臆病で***」「***悲観的である***」にもかかわらず、授業における自己表出の「***強さ***」が強調されてしまい、クラスメートに近寄りがたさを与えてしまっているかもしれないという不安 (competence face と fellowship face 間の揺れ)、そして表面的な関係ではなく真の自分を理解してもらった上で fellowship face を得たいという D の願望がうかがえる。その一方で、D は親友に傷つけられた過去の経験から人を信じることおよび人との距離が縮まることに臆病になっているとも語っている。「***自分のことを他の人に理解してほしい***」が「***すごく近い人には傷つけられやすい***」という表現から、fellowship と autonomy の間で揺れている D の姿も見受けられる。自由連想項目に対するイメージが +、0、– と混在していることからも D の心の揺れが感じられる。

<CL2>「バランスのとれた自己表出」

D は B、E に見られる「***自信***」「***几帳面さ***」「***反応の速さ***」「***頭のよさ***」

「***賢さ***」といった面に憧れを抱いている。このクラスターを、後述するCL4（「***緊張しすぎ***」「***自信ありすぎ***」といった「アンバランスな自己表出」のクラスター）と全く逆に位置づけていることから、CL2は「***緊張***」と「***自信***」のバランスがとれているクラスターであると捉えることができる。つまり、DはB、Eのcompetenceはもとより、その表出の仕方をも認めているということが言えるだろう。「***能力と性格の両方***」の要素がCL2には入っているというDの発言からもそれはうかがえる。一方でDは、自分は「***失敗***」すると「***性格***」的に「***すぐに自信をなくしてしまう***」が、その「***弱いところをみんなに見せないように頑張っている***」と述べている。これはCL1の「強さ」は近寄りがたさを与えるという考え方と矛盾している。これらから「緊張(弱さ)」と「自信(強さ)」のバランスをどのようにとっていくべきか模索しているDの姿が垣間見られる。

<CL3>「特異な自己表出――アイドル」

美しいファッションを身にまとっているモデルのようなAに対する憧れを表しているクラスターである。「***欲しい***」という気持ちもなくはないが、どちらかというと「***飾ってある感じ***」「***高い***」「***遠い***」「***届かない***」「***関係があまりない***」といった手に入らないのは当たり前といった感情が多くを占めている。Dはこれを Aの competence と捉え高く評価している。しかし、CL2に見られるほどのそれに近づきたいという強い願望は感じられない。それは「***ピンク***」[18]という色に対する「***ぼんやり***」、「***普通の人はピンクは届かない感じ***」といった表現にも象徴されている。

<CL4>「アンバランスな自己表出」

「***自信ありすぎ***」「***緊張しすぎ***」ということを、悪いことだと断言していないが、「***自分はそうなりたくない***」と評しているクラスターである。つまり、C、Gの能力の表し方を全面否定はしていないが、自信過剰および緊張のしすぎによって fellowship face および competence face が充たされなくなることを自分自身は避けたいと考えている。そして、授業においても生活においても「***緊張と自信の真ん中が目標***」であるとしている。また、

このクラスターは、能力そのものというよりも、その能力を表す「***性格***」についてのことであると D は述べている。

<全体>

デンドログラムの解釈時に D は全体に対するイメージ図を自ら描いている(図 4 参照)。CL1、CL2、CL3、CL4 は全て「自信」というシンボルを介した D の解釈となっている。D は自分の能力を表出しすぎる(「自信」を過剰に表す)ことによるクラスメートからの敬遠、発揮しないことによる能力不足の烙印を恐れていた (fellowship face と competence face 間の揺れ)。さらに、自分自身を他者に理解してもらいたいが、他者に近づきすぎて傷つくのは怖いとも感じていた (fellowship face と autonomy face 間の揺れ)。CL1 はこれら揺れの間で自己探求している D の姿を表している。CL2 はバランスのとれた自己表出(「自信」の表し方がうまい例)、反対に CL4 はアンバランスな自己表出(「自信」の表し方がうまいとは言えない例)を象徴している。そして、それら (CL2、CL4)は、自分はどうすれば皆に理解してもらえるかという D の自己探求 (CL1)に多いに影響を与えている。CL3 は、D にとって手が届かないところにある存在(能力)だという。そのため憧れはあるがそれが自分のものにならないことによる自分

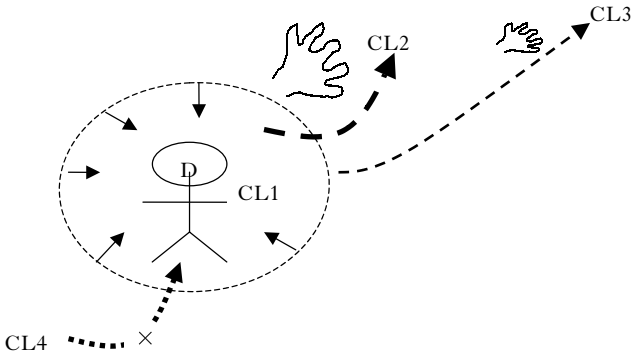


図 4　全体イメージ図(調査協力者 D 作図)

への影響は少ない。自分が他者からどのように見られるかということにあまり関係していないクラスターであると言えよう。

(2)　各成員のフェイスの充足、喪失、修復等

成員間の相互作用によって創造されたシンボルと各成員のフェイスの充足、喪失、修復等には関わりが見られる。

「自信がない」「真面目とは言えない」という位置にある A は、「自信のあるメンバーは怖い」「自分以上に真面目ではないメンバーがいる」といった解釈を行うことによって、自分の competence face の喪失を回避しようとしていた可能性がある。前者は「基準、規則、目標を変えること」（ルイス 1997、129 頁）による補償、後者は下方比較[19]による自己脅威への対処であると考えることができる。また「授業の開始時刻が早い」ということを PAC 分析において重要度の高い連想項目としてあげていたが、それは「朝は頭がよく働かない」「不真面目なわけではない」といったことの理由づけにもなっている。

B にとって「遅刻」は充たされない fellowship face の象徴であると言えよう。しかし、クラスで得た「自信」――自分自身にとってプライドが持てるフェイス――によって、充たされない感情を補っている様子がうかがえる。

C の「自信のなさ」は自他ともに認めるところであるが、C から competence face が強く脅かされている様子は見受けられなかった。その理由として、fellowship-face の充足をかなり感じていること、「自信」に対する兆しがあること、自尊心と目標達成のために、自分と心理的距離があり、かつ「自信」をもっている B、G を自分の比較対象としたこと（自己評価維持モデル[20]または上方比較[21]の可能性）が考えられる。

D は、自信過剰と緊張の間でうまく自分の能力を発揮している成員（B と E）を指針にしながら、fellowship、competence、autonomy のバランスのとれた自分を模索している。

E には「自信」「真面目さ」に関する言及が全く見られなかった。PAC 分析の解釈時「***悪いこと、いいこと、普通のことだけど温かい気持ち、人***

のいいこと。…私が日常生活で感じることはこの4つのグループに分かれる」と述べていたことからも、各状況に伴う相対的な自他への認識・評価ではなく、E自身の内的基準が存在していることが示唆される。

自らを「***凡人***」であると解釈しているFは、実際、終業時のクラスの集団構造の中で比較的中心に位置している。「自信がある」「真面目である」と他者から認識されており、また前者に関しては自らもそれを認めていること、さらに偏りのない存在としてクラス内に位置し、自由連想項目も全てプラスにイメージしていることから、自らのフェイスが脅かされるようなことが少なかった成員であると捉えることができる。

最後に調査協力者Gであるが、「自分は真面目とは言えない」ということに対し、Aと同様「自分以上に真面目ではないメンバーがいる」「真面目なメンバーは怖い」という解釈によって自分のcompetence faceを保持しようとしている様子がうかがえた。さらに「***この(勉強の意識が低く、怠け者である)せいで、大きいマイナスがあるけど、たぶんユーモアがあるからマイナスとプラスで0***」という表現からは、自分のユーモアによって不真面目さは補えるというGの考えが読み取れる。

以上のことから、各成員のフェイスワーク(充足、喪失、修復等)とシンボルとは関連性があるということが理解できるであろう。

4. まとめと今後の課題

本稿では、各成員がPAC分析の中で語った自己・他者・集団に対する解釈およびそこに表われたフェイスワークと、主観的発話量からみた集団構造およびPAC分析の結果から抽出されたシンボルとの間には相互作用があるということを示してきた。着目点として以下の三点があげられる。

第一に、集団構造および集団内での各成員の位置は、固定的な接近可能性(国籍および住居等)に限らず、集団内で創造されたシンボルと関わりを持ちながら形成されているという点である。これらのシンボルはこの集団を構成している成員間の相互作用によって創造されたものである。今回の結果はあくまでもプロセスの断面を切り取ったものにすぎない。もちろん

異なる成員によって異なる解釈および行為がなされた場合は異なるシンボルが創造される可能性がある。[22] さらには、属性そのものがシンボルとなる場合もあるだろう。しかし、いずれにしても、フェイスワークの解明には、属性・文化的要因だけでなく、相互作用によって創造されるシンボルとの関わりも視野に入れる必要があるということが言えるだろう。

第二に、各調査協力者のフェイスワークが表われていた自己・他者・集団に対する解釈と集団構造およびシンボルとの関係があげられる。本稿ではそれが顕著に表れている事例として調査協力者 D の PAC 分析の結果を示した。PAC 分析の中で D は自らのフェイスのバランスを模索していたが、D 自身とその目標となる B と E、目標にはならない自信過剰の G と緊張気味の C、憧れではあるが遠すぎて手が届きそうにない A が、D のデンドログラムの解釈のままに集団構造上に布置されていた。それはまるで D がクラスの集団構造およびそこにプロットされた各成員の「自信」に対する自他の評価を見ながら話しているのではないかと思わせるほどであった。また授業における自己表出の「強さ」がクラスメートに近寄りがたさを与えてしまうのではないかという D の懸念と、A と G が語っていた「自信」「真面目さ」に伴う「怖さ」も対応を示している。

第三に、シンボルに対する解釈および意味づけは各成員によって異なり、さらに、それら解釈および意味づけは各々のフェイスの充足、喪失、修復等と関わりがあるという点があげられる。「遅刻」に対して A、G は competence face 喪失、B は fellowship face 喪失の危機を感じていた。これらはシンボルに対する各成員の意味づけの違いから生じたものであると捉えることができよう。一方、自らのフェイスの修復に関しては、以下の三つの方策が見出された。第一に、シンボルそのものの価値を変えるという方策である。「自信」がある、または「真面目」であるということに「怖さ」を伴わせた解釈は、その一つの例であろう。第二に、精神的負担を軽くするために他者と比較するという方策である。比較と一言で言っても、自分よりも劣っていると思われる他者との比較、自分と距離のある他者との比較、あまり重要ではない分野についての比較、目標となる他者との比較というようにその形は様々である。自分にとって都合のよい比較を用いるこ

とによって自らのフェイス喪失を回避しようとしている各成員の様子がそれぞれの解釈からうかがえる。第三に、充たされていないフェイスを自らの別のフェイスによって補うという方策である。その例として、「真面目」ではないが「自信」または「ユーモア」がある、「自信」はないが集団との「関係」は充たされているといった解釈があげられる。いずれにしても、これらはシンボルに対する解釈および意味づけと、フェイスの充足、喪失、修復等との関わりが見出された事例であると言えるだろう。

以上のことから「自己との相互作用」（主観的な意味づけ: フェイスの充足、喪失、修復等の意味づけ）→「連携的な行為」（シンボルの創造）→「自己との相互作用」→…といったサイクルが繰り返されていることが示唆される。

今後の課題として、シンボル創造のプロセスと各成員のフェイスワークとの関わりについて検討していきたい。それに伴い、感情がシンボルの解釈および意味づけに影響を与えているのか、それとも解釈および意味づけから感情が生じているのか、その関係性についても明らかにしていく必要があるだろう。これらに加え、サイクルによって創造されるシンボルへの各成員のコミットメントの強さとグループの凝集性の関係、さらには、それらとフェイスワークとの関わりについても検証を試みたい。

本稿の限界として、解釈的アプローチという方法論による信頼性および妥当性の問題があげられるが、複数の事例を「トライアンギュレーション」[23] を用いて検証していくことにより、それらを出来る限り補っていきたいと考える。

注

1） self-face は自己のイメージへの関心 other-face は他者のイメージへの関心、mutual-face は両者および関係のイメージへの関心（Ting-Toomey and Kurogi 1998）をあらわしている。

2） 研究の哲学的前提（「実証 / ポスト実証主義」「解釈 / 社会構造主義」「解放主義」に関しては Mertens（1998）を参照のこと。

3） シンボルとは物や行為を指示しているしるしで、通常、コミュニケーションの当事者間ではその指示するものに対する共通の理解が成り立っている（末

田・福田 2003）と言われている。さらに、シンボルは人間によって創造された反応であり、1 つのシンボルに対する人間の反応は、各自の経験、価値観、世界観等に基づく意味づけによって多様なものになる（岡部 1997）とも言及されている。

4）　中級の会話クラス（週 2 回）である。ロールプレイ、ディベート、スピーチ等、他者の前でのアウトプットおよび他者との関わりが要求されるアクティビティが多い。

5）　全ての調査協力者より調査および調査内容公表の許可を得ている。なお調査協力者、国籍、住居を表示した記号は各々のイニシャルではなく筆者が無作為につけたものである。

6）　PAC 分析の詳細に関しては内藤（1997）を参照のこと。

7）　質問紙による他の項目の調査および参与観察も行っているが、紙面の都合により本稿ではそれらに関しては触れないこととする。

8）　調査は全て日本語によって行われた。

9）　A、B、C…にはそれぞれの学生の名前が入る。

10）　本来は量だけではなく内容の深さも調査すべきであろうが、日本語能力の問題から量以上に母語の影響を受けることが予想されるため、また学生の個人的感情への干渉を避けるため、ここでは発話量のみを測定することとした。なお、本調査では客観的な発話量ではなく、主観的な発話量を問う形式の質問紙を用いている。その方が各成員の個人的な感情が回答に反映しやすく、集団構造および集団内での各成員の位置を探るには適していると考えたためである。

11）　距離の算出には藤本・大坊（2003）を参考にした。

12）　多次元尺度法には SPSS、クラスター分析には Halwin を統計ソフトとして使用した。多変量解析の詳細に関しては室・石村（2002）を参照のこと。

13）　紙面の都合から本稿ではやむを得ず全調査協力者の解釈を示すことができない。出来る限り調査協力者自身の解釈の直接引用（***斜体***で示す）を用いることによってそれらを補っていきたいが、説明不足は否めない。その点はご了承いただきたい。

14）　本稿では始業時の集団構造に関しては触れないが、主に継続生（A、B、C、D）と新入生（E、F、G）の二つのグループに分かれる傾向が強くあらわれていた。

15）　自信がないと思われている方向を図に示すと、わかりにくくなってしまうため、あえて記載を控えた。

16）　プラス面として、調査協力者 A は B の「日本語能力」、G の「おもしろさ」「頭のよさ」、調査協力者 B は G の「おもしろさ」、調査協力者 G は A の「かわいさ」「明るさ」、B の「頭のよさ」「美しさ」「性格のよさ」を評価している。

17）　紙面の制約から、調査協力者 D のデンドログラムと調査協力者 D 自身の解

釈をもとに調査者(筆者)が行った総合解釈を中心に見ていくことする。なお、クラスター 1 は「CL1」、クラスター 2 は「CL2」、クラスター 3 は「CL3」、クラスター 4 は「CL4」と示す。

18）「このクラスターを色に例えると ?」という質問に対し「ピンク」と答えている。なお、CL2 の印象は「青」であった。

19） 自分より劣った者と比較することによって主観的な安定感を得ようとすること。自分に対する脅威が存在する際に生じやすい（Wills 1981）。

20） Tesser（1988）の自己評価維持モデルには、自己評価の低下の行動調整として、比較対象と自分との心理的距離を遠くする、自己規定領域(重要な領域)との関連性を低くするといった方策がある。実際、C は B、G の「自信」を「日本語能力」からではなく、彼らの「外見」「性格」によるものであると評価している。

21） 自分より優位にある者と比較すること。「同化的な場合と、凌ぐべき目標として他者を対比的に捕らえる場合の、2 つの様態がある」（高田 2004、124 頁)と言われている。

22） 本稿では触れないが、他の集団に対する調査においても、その集団特有のシンボルが創造されている。

23）「トライアンギュレーション」に関してはフリック（2003）を参照のこと。

引用・参考文献

岡部朗一（1997）「シグナルとシンボル――第 IV 部: 重要キーワードの解説」石井敏・久米昭元・遠山淳・平井一弘・松本茂・御堂岡潔　編『異文化コミュニケーション・ハンドブック』（246 頁）有斐閣。

ゴフマン、E.（浅野敏夫　訳）（2002）『儀礼としての相互行為』法政大学出版局。

末田清子（1988）「中国人学生と日本人学生の「面子」の概要及びコミュニケーション・ストラテジーに関する比較の一事例研究」『社会心理学研究』13 巻 2 号、103–111 頁。

末田清子・福田浩子（2003）『コミュニケーション学 その展望と視点』松柏社。

高田利武（2004）『「日本人らしさ」の発達社会心理学』ナカニシヤ出版。

内藤哲雄（1997）『PAC 分析実施法入門』ナカニシヤ出版。

藤本学・大坊郁夫（2003）「小集団のソシオメトリック・ステータスに関する分析手法」『日本心理学会第 67 回発表論文集』、211 頁。

船津　衛（1995）「第一章　シンボリック相互作用論の特質」船津衛・宝月誠　編『シンボリック相互作用論の世界』（3–13 頁）恒星社厚生閣。

フリック、U.（小田博志・山本規子・春日常・宮地尚子　訳）（2003）『質的研究入門――〈人間科学〉のための方法論』春秋社。

ブルーマー、H.（後藤将之　訳）（1991）『シンボリック相互作用論』勁草書房。

室淳子・石村貞夫（2002）『SPSS で学ぶ多変量解析』東京図書。
ルイス, M.（高橋恵子　訳）（1997）『恥の心理学』ミネルヴァ書房。
横林宙世（2005）「日本語力の低い留学生に対しての面接調査――PAC 分析の有効性」河原崎幹夫先生古希記念論文集実行委員会 編『教師づくり教材づくり日本語教育』（71–82 頁）凡人社
Brown, P. and S. C. Levinson（1987）. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge, England: Cambridge University Press.
Hofstede, G.（1991）. *Cultures and Organizations: Software of the Mind*. London: McGrw-Hiss.
Hu, D. H.（1944）. The Chinese concepts of 'face'. *American Anthropologist*, 46, 45–64.
Lim, T., and J. W. Bowers（1991）. Facework: Solidarity, approbation, and tact. *Human Communication Research*, 17, 451–450.
Marks, H. R., and S. Kitayama（1991）. Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224–253.
Mertens, D. M.（1998）. *Research Methods in Education and Psychology*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
Oetzel, J., S. Ting-Toomey, T. Masumoto, Y. Yokochi, X. Pan, Takai, J., and Wilcox, R.（2001）. Face and facework in conflict: A cross-cultural comparison of China, Germany, Japan, and the United States. *Communication Monographs*, 68(3), 235–258.
Tesser, A.（1988）. Toward a self-evaluation maintenance model of social behavior. *Advances in Experimental Social Psychology*, 21, 181–227.
Ting-Toomey, S.（1988）. Intercultural conflict styles. IN: Y. Y. Kim and W. B. Gudykunst（Eds.）, *Theories in Intercultural Communication*（pp. 213–235）. Sage Publications.
――――― and A. Kurogi（1998）. Facework competence in intercultural conflict: An updated face-negotiation Theory. *International Journal of Intercultural Relations*, 22, 187–225.
Triandis, H. C.（2001）. Individualism and Collectivism: Past, Present, and Future. IN: D. Matsumoto（Ed.）, *The Handbook of Culture and Psychology*（pp. 35–50）. NY: Oxford University Press.
Wills, T. A.（1981）. Downward comparison principles in social psychology. *Psychological Bulletin*, 90, 245–271.